コインの知らせ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コインの知らせ

【Ｎコード】
Ｎ０４３７Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
卓也はどうするか判断をつきかねていた。どうしても決断できないので遂にコインの裏表で決めることにしたが。オムニバス小説です。

第一章

コインの知らせ

どうするか、それが問題であった。
「生きるべきか死すべきか」
ここで彼はシェークスピアの言葉を呟いた。
「何かどっちにするかってことだよな」
悩んでいる顔でまた呟く。
「どっちにするかだよなあ」
「ちょっとお兄ちゃん」
ここで部屋の外から小さな女の子の声が聞こえてきた。
「どっちにするの？」
「それを悩んでるんだろ」
彼は今家の中の自分の部屋にいる。そこの机に座って悩んでいたのだ。
「どうするかな」
「？何言ってるのよ」
だが女の子の声がその言葉に疑問符を投げ返すものであった。
「もう晩御飯よ」
「えっ！？」
そう言われて今度は彼が言葉に疑問符をつける番であった。
「そうなのか」
「そうなのかってもう七時半になってるわよ」
女の子の声はまた言う。
「おかずはハンバーグよ。お兄ちゃんの好物じゃない」
「ああ、ハンバーグか」
彼はそれを聞いてまた頷くのであった。
「じゃあ行くよ。それでいいよな」
「いいのかじゃなくて早く来てくれってことよ」

女の子の声はまた言ってきた。
「さもないとお母さんかんかんよ」
「げっ、そうなのか」
彼の母はかなりおっかないのだ。それこそ少しでも遅れるとエルボースタンプが飛んで来る。何と空手五段である。実家は道場で柔道六段の父、つまり夫とは勝負の末に結ばれたというとんでもない女傑なのである。
「わかったよ。じゃあ行くよ」
「そうした方がいいわよ」
「しかし。本当に決めないとな」
彼はあらためてまた思うのであった。
「どっちかにしないとな。本当に」
そう呟きながら立ち上がる。そうして下に降りて夕食を食べに行くのであった。
和風の今時珍しいちゃぶ台のところにはやたらとごつく大きい中年の男女と小柄で可愛らしい女の子、そして彼が一緒にいる。見れば彼もかなり大きい。
「卓也」
そのごつい中年の女傑が彼に声をかけてきた。見れば彼女の前のハンバーグは殆ど座蒲団の様なサイズである。その手の丼は普通の御椀の何杯分あるかわからない。
「遅かったんじゃないの？」
「そうかな」
「勉強でもしていたのかい？それともゲームかい？」
「いや、全然」
それははっきりと否定するのだった。
「それはないよ」
「じゃあ何なんだい？」
「ああ、別に」
とりあえず誤魔化すことにした。

「別にないから」
「好きな子でもできたってわけじゃないんだね」
「ああ、それはね」
ここでその彼卓也は微妙な顔になるのであった。
「それはないから」
「何だ、面白くないな」
今度はその巨大な中年の男が言ってきた。見れば童顔で顔は卓也にそっくりである。小さな女の子は女傑をかなり可愛くした感じである。どうやら二人共かなり異伝は上手くいったらしい。それを考えれば実に運がいいと言える。
「せめて告白されたとかだったらな」
「まあそれはね」
ここで言葉が少し微妙になる。
「何ていうかね」
「何かあったの？やっぱり」
「いや、だから何もないんだよ」
妹に言われてもそれを否定する卓也だった。それどころか話を誤魔化す為か逆に彼女に対して話を振るのだった。
「それより未菜」
「何？」
「御前最近帰るの遅くないか？」
「部活だからね」６
妹の未菜は普通の顔でハンバーグを食べながら言葉を返した。
「最近練習が厳しいのよ」
「そうだったのか」
「今度練習試合なのよ」
なお彼女は女子テニス部である。そこでエースなのだ。兄妹揃って抜群の運動神経を誇っていると言われている。
「それで練習がハードになってるの」
「ふうん」

「それ前言ったと思うけれど」
逆に妹から反撃を受けてしまった。
「憶えてないの？」
「ああ、御免。忘れてた」
「しっかりしてよ。まあ何もなにんだったらいいわ」
未菜もそれで納得するのだった。これで話は一旦終わった。
「おかわりは？」
「もう一杯」
卓也も未菜も丼を出す。見れば二人共本当によく食べる。育ち盛りにしてもその量はかなりのものであった。電子ジャーも殆ど商業用の大きさである。
「それ食べて力つけないとな」
「お兄ちゃん、それはあたしの台詞よ」
未菜が顔を顰めさせて言葉を返す。
「気をつけてよ」
「俺もなんだよ」
「俺も？」
「ああ、そうなんだよ」
「一体何なのよ」
それがはっきりしないまま夕食を食べていく。夕食を食べ終えた卓也はすぐに自分の部屋に帰ってまた考える。しかし暫く考えるうちに意を決した顔で呟くのだった。
「こうなったらあれだな」
そう言って机の引き出しから出したのは一枚のコインだった。十円玉である。
それを上に投げる。キラキラと輝いて回転しながら上から下に落ちていくコインを見ながらまた呟く。
「表なら。裏なら」
それで決めるつもりだった。今そのコインが机の上に落ちた。
「表か！？それとも裏か」

それが問題だった。果たしてどちらか。

表が出た　　→第二章へ
裏が出た　　→第三章へ
特殊なケース→第四章へ

第二章

表が出た。
十円玉が机の上に落ちる。出たのは表だった。
「よし」
卓也はそれを見て頷く。表ならば行くのは。
「合気道か」
実は彼は助っ人を頼まれていたのだ。彼は空手部にいて柔道も黒帯だ。その為何かあると助っ人を頼まれるのだ。今回は合気道部と剣道部の両方から助っ人を頼まれていた。しかしその試合は同じ日だったのだ。それでどちらにするか迷っていたのである。
「よし。それなら」
何はともあれ合気道部への助っ人に決まった。後は携帯で連絡を取って正式に決める。後は試合の日まで練習をするだけだった。そうしてその試合の日になった。
場所は卓也の学校の道場だ。合気道部の面々と一緒に道着に着替えて試合前の打ち合わせをしている。ところがここで。
「あれ、今日は試合じゃないのか」
「試合っておい」
合気道部員の一人が呆れた顔で彼に言ってきた。
「合気道だぜ」
「ああ」
それはわかっている。受ける時にもうそれを聞いていたのだ。
「それで何で練習なんだよ」
「あれ、でも相手を投げるんだよな」
実は合気道の練習はしていても肝心のルールはあまりどころか全然調べていなかったのだ。柔道と同じようなものだと考えていたのだ。
「それはそうだけれど」

「組み合うんじゃないぞ」
「そうなのか」
はじめてそれを聞いて目を丸くさせる卓也であった。そのうえであらためて自分の格好を見る。上着は白で下は黒い袴だ。少なくとも空手や柔道とは全く格好が違う。
「型なんだよ、合気道は」
「型か」
「そうだよ。絶対にこっちからは仕掛けないんだ」
それこそが合気道である。かなり独特なものなのだ。
「仕掛けるのはあれだよ。韓国のハプキドー」
「ハプキドー！？ああ、ブルース＝リーの映画で出て来たあれか」
これについては卓也も知っている。といっても名前だけだが。
「そう、あれとはまた違うから」
「そうか」
「おい、大丈夫なのか！？」
「本当に相手を自分から投げるなよ」
「わかったよ」
部員達の言葉に頷いて応える。しかし目がいささか泳いでいる。
「それじゃあ。ただ型だけだな」
「型はわかるよな」
「それはな」
知らない筈がない。それは空手でも柔道でもあるからだ。
「まあ任せてくれよ」
「というか任せるしかないしな」
「こっちも頼み込んだ側だしな」
それも無理を言ってた。彼等も必死だったのだ。
「まあ宜しく頼むな」
「わかってるさ。じゃあ」
こうして型に入る。しかし実際にやってみるとどうしても仕掛けたくなる。それでうずうずして仕方がなかったのだ。

「ああ、困った」
やっているうちにそれを我慢できなくなる。
「何かこっちから仕掛けて投げたくなるぜ」
「止めろよ」
しかしそれは周りに止められるのだった。
「そんなことされたら洒落にならないからな」
「頼むぞ」
「わかってるって。しかし」
それでも我慢できない。それでも何とか堪えながら型が終わるのを待っていた。そうしてやっとといった感じで終わる。終わって彼が最初にしたことは。
「ちょっと行って来る」
「何処に行くんだ？」
「柔道部の部室だよ」
彼が行くのはそこであった。
「そこでな。ちょっと」
「投げるのか？」
「ああ、練習台でな」
せめてそれで仕掛けて投げずにはいられなかったのだ。そうしないと欲求不満で爆発しそうだったのだ。これが彼の性分であった。
「投げなくってくる」
「合気道は性に合わないか」
「どうにもな」
首を捻って部員達に答える。
「やっぱり俺は投げまくる方がな」
「そうか。何か悪かったな」
「ああ、いいよ」
申し訳なさそうにする彼等に対して彼もバツの悪い顔になる。
「それはな。気にするなよ」
「そうか」

そんな話をするがそれでもバツが悪いのは変わらない。どうにも最後まで今一つ乗れず消化不良な感じが残ってしまうのであった。

第三章

裏が出た。
「よし」
卓也はコインの裏を見て頷く。
「じゃあ剣道か」
実は彼は助っ人を頼まれていたのだ。彼は空手部にいて柔道も黒帯だ。その為何かあると助っ人を頼まれるのだ。今回は合気道部と剣道部の両方から助っ人を頼まれていた。しかしその試合は同じ日だったのだ。それでどちらにするか迷っていたのである。
「よし。それなら」
何はともあれ剣道部への助っ人に決まった。後は携帯で連絡を取って正式に決める。後は試合の日まで練習をするだけだった。そうしてその試合の日になった。
まずは道着を着け準備体操をしてから防具を着ける。着け方は何となくわかった。
「あれ、わかるんだな」
「一応はな」
そう剣道部員達にも答える。
「話には聞いていたし空手でもプロテクターがあるしな」
「だからか」
「ああ。それでも面とかはな。練習だけはしてみたけれどな」
「ははは、あれはな」
部員達は卓也の言葉に笑う。
「慣れていないとな。かなり難しいよな」
「難しいっていうかな」
卓也は垂れや胴を着けている。それ自体はかなり慣れた動きだ。詩化して拭いになると今一つであった。それを自分でも自覚しているので困った顔になっている。それでも何とか着けることができた。

「こんなもんか？」
「そんなものだろ。試合自体は短いしその間はもつさ」
「剣道も大変なんだな」
頭の手拭いを上に見上げるふうししながら言うのだった。
「いつもこんなの着けて練習なんて。俺にはちょっと」
「慣れればそれ程でもないよな」
「なあ」
しかし彼等にとってみればそうらしい。顔を見合わせて話をするのだった。
「あくまで慣れればだけれどな」
「慣れてないとな」
「やっぱりそうじゃないか。慣れるまでも大変そうだな」
立ち上がって動いてみる。何とか動くがそれでも顔は不安なままだ。
「摺り足はできるけれどな。どうも防具があると」
「普段より動きにくいだろ」
「これに面を着けてか。大丈夫かな」
「勝たなくてもいいから」
「試合に出てくれるだけでいいんだよ」
彼等の注文は実に安いものだった。卓也はそれを聞いてその目を少しいぶかしめさせるのだった。
「それだけでいいんだな、本当に」
「幾ら空手や柔道の黒帯でも剣道は初心者だしな」
「向こうが人多いんでどうしてもだし」
「そうか。じゃあまあ出るだけなら」
問題はないかと思った。とりあえず摺り足をしてみてそれも準備体操にする。そうして身体を整えながら練習試合に備えるのであった。
やがて相手が来て本格的な試合になる。何人かの試合が終わって遂に卓也の番になる。面は部員が着けてくれた。

「これでよしっ、と」
「悪いな」
「何、いいってことさ」
その部員は笑って彼に応える。ただし面を着けているうえに彼は後ろにいるのでその顔はよくは見えない。面を着ければその視界がかなり制限されるのだ。
「じゃあ頼むぜ」
「ああ」
そんなやり取りの後で試合場に向かう。場所は卓也の学校の剣道部の体育館なので勝手は知っている。場所は慣れているが肝心の剣道に慣れてはいないのだった。
その慣れていない剣道をするので正直不安だ。だがそれでも受けたのなら最後までやるつもりだった。それで礼をして相手に対するのだった。
構えてみる。構え自体は見事なものだと自分でも思う。問題はそれからだがこちらが仕掛けるより前に向こうが向かって来たのだった。
「きえーーーーっ!!」
「いきなりかよ!」
相手が面を打って来たのを見て思わず叫ぶ。しかしその叫びが出るとほぼ同時に相手が面を打ち込んで来た。何とか首を右に捻ってかわしたが肩に受けてしまった。
「つう・・・・・」
かなり痛い。直撃だった。しかもその痛みに耐えるのも許されず相手は今度は体当たりを仕掛けて来た。だがそれは彼にとっては好機であった。
「おっ、来るのか」
痛みに耐えながら相手のその動きを見る。見れば電車道一直線だった。彼はそれを見て心の中で笑うのだった。
「そう来るのなら。俺だってな!」

柔道での経験を生かすつもりだった。体当たりならお手のものだ。しかも彼は体格に恵まれている。こうしたぶつかり合いはお手のものだったのだ。

その彼に向かう相手こそ無謀だった。しかし相手は彼のことを知らない。それもまた彼にとってはいいことであった。何もかもが彼にとっていいことであった。その中で相手は彼にぶつかるのだった。その瞬間だった。

「今だ！」

彼は思いきり前に出た。そうして逆に相手にぶつかるのだった。

力は彼の方が圧倒的に強かった。やはり柔道の経験がものを言った。相手はそれでフ白に吹き飛ばされた。何とか倒れずに踏み止まったがそれにより態勢を完全に崩してしまった。これこそが卓也の狙いだったのだ。そして彼はそれを逃しはしなかった。

「もらった！」

そのまま前に出て面を決める。初心者とは思えない程奇麗に面が入った。誰がどう見ても一本であった。それで勝負は決まった。体当たりで流れを掴まれた相手はもうどうすることもできなかった。もう一本も呆気なく決められて勝負は終わったのであった。卓也にとっては鮮やかな勝利であった。

「やったな」

「ああ」

試合が終わってから卓也は笑顔で部員達と話をしていた。皆彼の会心の勝利を祝っていた。

「まさかな。あんなに上手くいくなんてな」

「自分でも思わなかったのか」

「思うわけないだろ？」

また笑って彼等に告げる。

「俺は初心者だぜ。それなのにこんなに上手く勝てるなんてな」

「素質、じゃないよな」

「ああ、それはない」

自分でもそれは否定するのだった。
「あれだよな。やっぱり体当たりだ」
「それか」
「あれでも別にいいんだよな」
今度は試合の運び方について彼等に問う。
「体当たりを仕掛けても」
「ああ、別にいいぜ。というよりかは」
その部員はここで答えるのだった。それは卓也が今まで考えていなかった剣道のスタイルであった。
「あれもいいんだよ」
「体当たりもか」
「というかあれ使うのと使わないのとで全然違うな」
「柔道でもそうだろ？」
柔道の話も出た。
「ぶつかりも大事だろ、やっぱり」
「その通りさ」
実際にそれを応用したのだからこう答えるのも当然であった。
「それと同じだよ。剣道もな」
「そうだったのか」
「柔道だって色々な試合の運び方があるよな」
これは言うまでもない。それこそ柔道をしている人間の数だけの運び方がある。それは剣道でも同じだというのである。
「そういうことさ」
「そうなのか」
「ああ。だからあれもありなんだよ」
「そうか、わかったよ」
卓也は彼等の言葉を聞いて頷いた。納得した顔で。
「成程な。剣道でもか」
「勉強になったか？」
「ああ、よくな。まあまた剣道をやるかどうかはわからないけれど」

「おいおい、そう言うなよ」
それを言うとすぐに彼等から言われた。
「また頼むぜ」
「御前強いんだからな」
「何だよ、さっきと言ってることが違うぜ」
彼等の態度が変わったことに思わず苦笑いを浮かべる。
「全く。現金だよな」
「そう言わずにな」
「ちぇっ、ただじゃ嫌だぞ」
卓也も少し意地悪に言うことにした。しかし悪意はない。
「せめてラーメンかハンバーガーでもな」
「わかってるって」
「それ位はな」
「だったらいいけれどな」
案外安い。しかしそれも高校生なら当然だった。
「まあそういうことでな。しかし剣道も」
「中々いいだろ」
「ああ、気に入ったよ」
にこりと笑って微笑む。彼にとっては楽しい助っ人であった。

第四章

特殊なケース

コインを投げた。ところがこれが。

「！？」

何と床に落ちてそこから畳の隙間に挟まった。表も裏もなかった。

「おい、何だよこれ」

流石にこれは予想していなかった。どうしようかと思ったがここは思い切ることにした。

「それなら」

何と彼はここで両方行くことにしたのだった。またかなり思い切りがよかった。

まずそれぞれの試合時間を調べる。剣道の方が早い。

「まずは剣道に行って」

掛け持ちも考えればやれないことはない。同じ学校ですることが彼にとってラッキーだった。今回はそれを活かすことにしたのだった。

練習も両方する。当日に備えるのも倍の苦労が必要だった。しかし一度決めたことを変えるのは好きではなかった。それで両方も倍になる。それでも整えていく。そうして当日を迎えるのだった。

当日。まずは剣道をする。道着はそのままで行くことにしたので上着は白である。

防具を着ける時。どうしても不安になることがあった。

「なあ」

「何だ？」

「別に防具の紺色が上着に着いたりしないよな」

彼はそれを気にしていたのだ。剣道着や防具の紐には藍染を使うのでそれが着くと後の合気道の試合で支障が出るからだ。

「ああ、それはないから」

「ないのか」
「そんなの使う程いい防具じゃないしな」
いささか情けないが高校の防具であることを考えれば当然であった。
「だからそれはないから」
「じゃあ安心して着けていいんだな」
「匂いはきついけれどな」
防具特有のあの納豆の如き匂いだ。これは小手が最もきつい。
「それはいいよな」
「そんなの風呂に入れば取れるさ」
だからそれはいいとした。
「それよりな」
「色が気になるんだな」
「いや、それはもう終わったから」
安心していた、それよりも重要な問題が彼にはあった。
「時間は」
「そういえば御前」
「そうだよ。次は合気道だ」
準備体操をしながら答える。掛け持ちだからそれが心配なのだ。
「悪いが試合が終わったらすぐにな」
「あっちに行くのか」
「悪いがそれでいいよな」
「試合の後で相手校と合同の練習があるんだけれどよ」
「それに出る時間はないな」
それは間違いなくなかった。その時間は完全に合気道の時間だからだ。彼にも都合があるのだ。その都合を優先するしかなかった。
「そういうことでな」
「わかったよ。じゃあそれで頼むな」
「ああ、そういうことでな」
こうしてまずは剣道の試合に出る。体当たりを有効に使って勝っ

た。それで試合が終わるとすぐに防具を脱いでしまう。そのうえで合気道の道場に向かうのであった。
「それじゃあな」
「御前も忙しいんだな」
「忙しくしてるのは何処の誰だよ」
苦笑いを浮かべて剣道部員の一人に突っ込みを入れる。
「まあいいさ。それは言いっこなしでな」
「今日は有り難うな」
「ああ。御礼はビックマックでな」
「高いな」
ビックマックと聞いて今度は向こうが苦笑いを浮かべる。学生らしい話だった。
「それ位いいだろ。助っ人なんだからな」
「それもそうか」
「また何かあったら呼んでくれ。それじゃあな」
「ああ、またな」
挨拶もそこそこに合気道の場に向かう。流石に掛け持ちは辛く疲れている。言い換えれば力が抜けた。
合気道の道場に着くと。もう合気道部員達は準備体操を終えていた。そうして道場にやって来た彼に声をかけるのだった。既に彼は汗をかいて結構疲れていた。
「また随分と汗をかいてるな」
「ああ」
合気道部員の一人の言葉に応える。その汗は剣道の時に面の下に着けていた手拭いで拭く。そうしながら話をするのであった。
「何とか試合は頑張るからな」
「ああ、それはいいんだ」
だがそれはいいと言われた。
「!?どうしてだよ」
「合気道だぜ」

そこを強調される。
「だからな。別にそれはな」
「話がよくわからないんだけれど」
「合気道は攻めないんだよ」
今度はこう言われた。
「だからな。別に力はいらないしな」
「そうだったのか」
はじめて聞いた。実は合気道の中身については全く知らなかったのだ。
「だから。かえっていいかもな。型だけだし」
「型だけか」
それを聞くと心持ちが楽になった。それならば問題はなかった。
「そうだよ。それはいけるよな」
「まあ型だけならな」
問題はなかった。それだけの体力は十二分にある。何しろ剣道部の練習は抜けてきたからだ。
「いけるぜ」
「よし、じゃあやってくれ」
あらためて頼まれる。
「期待しているぜ。何しろ向こうの部員がかなり多くてな」
「それだけこちらも数が必要だったんだな」
「そういうことさ。それじゃあな」
「ああ、任せてくれよ」
そんな話をしながら合気道の型に参加する。程よく力が抜けて楽しい時間を過ごせることができた。合気道の型も終わると彼はこれまでにない満足感を感じていた。
「いやあ、よかった」
「そんなにか」
「二つ出ただろ」
まずは掛け持ちのことについて言及する。

「それでな。力も抜けたし」
「それだけじゃないんだな」
「剣道も合気道もいいものだよな」
それがわかったことが大きかった。それにより精神的にも満足感を得ていたのだ。それは顔にも出ていて汗の中でにこやかな顔になっていた。
「はじめてやってみたけれどな」
「よかったか」
「正直力が抜けていたしな」
それが大きいことが自分でもわかっていた。
「かえって。よかったよ」
「そうか」
「これで力が有り余っていたらわからなかっただろうな」
そのうえでこうも分析する。自分でも納得できる自己分析であった。
「実際のところ」
「そうか」
「まあ気に入ったのは事実だよ」
笑顔で述べる。
「だからな。また機会があったら」
「ああ、またな」
「宜しくな」
最後に言葉を交える。それもまた爽やかな雰囲気の下だった。その爽やかな雰囲気の中で卓也は彼等と別れ帰路についた。実に心地よい気分で。コインが導いてくれた爽やかな気持ちであった。

コインの知らせ　　完

2008・2・9

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0437e/

コインの知らせ

2010年10月8日15時30分発行